

研究発表・各種委員会等の会場・時間帯一覧表

		第一会場 I 哲学思想部会 II 文学語学部会 5号館2階5201教室	第二会場 II 文学語学部会 5号館2階5202教室	第三会場 III 日本漢文部会 II 文学語学部会 5号館3階5301教室	
10日 (土)	9:50~10:20	【開 会 式】 第二会場 5号館2階5202教室			
	10:30~11:00	浜村 良久・ 水野 実(10)	佐野 誠子(18)	湯城 吉信(41)	
	11:00~11:30	明神 洋(11)	岩崎 華奈子(19)	関 幹雄(42)	
	昼 休	【記 念 撮 影】 モニュメント(翔)前(雨天時:5号館ピロティ)			
		【各種委員会】 3号館4階各教室			
	13:30~14:00	恩塚 貴子(12)	乾 源俊(20)	榎木 亨(43)	
	14:00~14:30	志村 敦弘(13)	石 碩(21)	李 思漢(44)	
	14:30~15:00	金 東鎮(14)	丸井 憲(22)	及川 茜(45)	
	15:00~15:30	廖 明飛(15)	好川 聡(23)	陳 文佳(46)	
	16:00~	【総 会】 5号館2階5202教室			
17:00~	【懇 親 会】 若木タワー18階 有栖川宮記念ホール				
11日 (日)	10:00~10:30	井澤 耕一・ 橋本 昭典(16)	丹羽 博之(24)	李 由(47)	
	10:30~11:00	竹元 規人(17)	富 嘉吟(25)	中里見 敬(35)	
	11:00~11:30	柴崎 公美子(30)	川合 康三(26)	八木 はるな(36)	
	11:30~12:00	堀川 慎吾(31)	橘 千早(27)	福長 悠(37)	
	昼 休	【理 事 会】 若木タワー地下1階 02会議室			
		13:30~14:00	王 竹(32)	小島 明子(28)	権 慧(38)
	14:00~14:30	佐高 春音(33)	土田 秀明(29)	蓋 暁星(39)	
	14:30~15:00	笠見 弥生(34)		張 瑤(40)	
	15:10~	【閉 会 式】 第二会場 5号館2階5202教室			

※氏名横の(数字)は要旨掲載頁

■諸会費

- ・大会参加費 2,000円
- ・懇親会費 5,000円(院生3,000円)
- ・昼食弁当代 1,000円/1食
- ・写真代 1,000円

■ご案内

- ・喫煙は指定の場所(5号館西側)にてお願いします。
- ・大学の食堂・コンビニは10日(土)のみ営業しています。
- ・10日の各種委員会・11日の理事会の出席者には昼食弁当が出ます。
- ・託児室のご案内は52、53頁をご覧ください。

日本中国学会第六十七回大会プログラム

I 哲学思想部会 (五号館五二〇一教室)

十月十日 (土) 午前

I-1 孔門における修養法 (十時三十分～十一時)

浜村 良久(防衛大_学校)・水野 實(防衛大_学校)

司会 弼 和順(北海道大_学)

I-2 『荀子』の天人分離説と礼論について (十一時～十一時三十分)

明神 洋

司会 弼 和順(北海道大_学)

十月十日 (土) 午後

I-3 北魏高允の人材登用理論とその実践 (十三時三十分～十四時)

恩塚 貴子(台湾大_学大学院)

司会 渡邊 義浩(早稲田大_学)

I-4 心の中の天——王陽明「良知」考 (十四時～十四時三十分)

志村 敦弘(東洋大_学大学院)

司会 永富 青地(早稲田大_学)

I-5 來知徳の錯綜説——王夫之と比較して (十四時三十分～十五時)

金 東鎮(京都大_学大学院)

司会 近藤 浩之(北海道大_学)

I-6 敖繼公『儀礼集説』における朱子学の受容 (十五時～十五時三十分)

廖 明飛(京都大_学大学院)

司会 吾妻 重二(関西大_学)

十月十一日 (日) 午前

I-7 『経学歴史』手稿本からみる皮錫瑞の経学観 (十時～十時三十分)

井澤 耕一(茨城大_学)・橋本 昭典(奈良教育大_学)

司会 野間 文史(二松学舎大_学)

- I-8 「読書」と「歴史」——顧頡剛の中国学術史上における位置について
(十時三十分～十一時) 竹元 規人(福岡教育大学)
司会 吉田 純(名古屋大学)

Ⅱ 文学語学部会 (五号館五二〇一教室・五二〇二教室・五三〇一教室)

十月十日 (土) 午前

五号館五二〇二教室

- Ⅱ-1 『天地瑞祥志』所引志怪佚文について——第十四神項からの考察

(十時三十分～十一時)

佐野 誠子(名古屋大学)

司会 富永 一登(広島大学)

- Ⅱ-2 『封神演義』における天意と情義の衝突(十一時～十一時三十分)

岩崎 華奈子(九州大学大学院)

司会 二階堂 善弘(関西大学)

十月十日 (土) 午後

五号館五二〇二教室

- Ⅱ-3 李白の送別歌行(十三時三十分～十四時)

乾 源俊(大谷大学)

司会 市川 桃子(明海大学名誉教授)

- Ⅱ-4 「李白と謝朓」再考——「澄江浄如練」を例として

(十四時～十四時三十分)

石 碩(早稲田大学)

司会 市川 桃子(明海大学名誉教授)

- Ⅱ-5 杜詩双声疊韻新考——その文学表現としての機能について

(十四時三十分～十五時)

丸井 憲(早稲田大学非常勤講師)

司会 谷口 真由実(長野県短期大学)

- Ⅱ-6 「唐詩変革」(十五時～十五時三十分)

好川 聡(岐阜大学)

司会 谷口 真由実(長野県短期大学)

十月十一日(日) 午前 **五号館五二〇二教室**

II-7 白居易の王維「秋夜独坐」利用(十時〜十時三十分)

II-8 『文苑英華』における『白氏文集』諸本の利用状況
(十時三十分〜十一時)

II-9 規範と表現——謝靈運「述祖德詩」をめぐる——
(十一時〜十一時三十分)

II-10 詞の形式の確立についての再考察——唐代韻文作品を用いて——
(十一時三十分〜十二時)

十月十一日(日) 午後 **五号館五二〇二教室**

II-11 青年期王国維の文学論と土台としての詩詞創作
(十三時三十分〜十四時)

II-12 毛沢東『矛盾論』の「矛盾」の語法に関する一考察
(十四時〜十四時三十分)

十月十一日(日) 午前 **五号館五二〇一教室**

II-13 「薛仁貴三箭定天山」故事を題材とする戯曲作品について
(十一時〜十一時三十分)

II-14 公案小説集における訟師秘本からの影響について
(十一時三十分〜十二時)

丹羽 博之(大手前大学)

司会 澤崎 久和(福井大学)

富 嘉吟(立命館大学大学院)

司会 澤崎 久和(福井大学)

川合 康三(國學院大学)

司会 齋藤 希史(東京大学)

橘 千早(中央大学非常勤講師)

司会 萩原 正樹(立命館大学)

小島 明子(お茶の水女子大学大学院)

司会 錢 鷗(同志社大学)

土田 秀明(佛教大学非常勤講師)

司会 平田 昌司(京都大学)

柴崎 公美子

司会 高橋 文治(大阪大学)

堀川 慎吾(東北大学大学院)

司会 高橋 文治(大阪大学)

十月十一日(日) 午後 五号館五三〇一教室

II-15 『紅樓夢』における莊子の世界

—第六十三回所引范成大「重九日行營壽藏之地」を中心に

(十三時三十分～十四時)

王竹 (桃山学院大学大学院)

司会 船越 達志 (名古屋外国語大学)

II-16 『水滸伝』の呼称表現—語り手はいかに人物を「待遇」するか—

(十四時～十四時三十分)

佐高 春音 (東京大学大学院)

司会 佐藤 晴彦 (神戸市外国語大学名誉教授)

II-17 『初・二刻拍案驚奇』の韻文について (十四時三十分～十五時)

笠見 弥生 (東京大学大学院)

司会 佐藤 晴彦 (神戸市外国語大学名誉教授)

十月十一日(日) 午前 五号館五三〇一教室

II-18 濱一衛の北平留学と上演史研究の成立 (十時三十分～十一時)

中里見 敬 (九州大学)

司会 波多野 真矢 (國學院大学非常勤講師)

II-19 白先勇「玉卿嫂」の再創造とその意味 (十一時～十一時三十分)

八木 はるな (東京大学大学院)

司会 池上 貞子 (跡見学園女子大学)

II-20 穆時英「斷了條絡膊的人」論—特に心理の表現に着目して—

福長 悠 (東北大学大学院)

司会 鈴木 将久 (一橋大学)

十月十一日(日) 午後 五号館五三〇一教室

II-21 村上春樹文学の中国語訳と韓国語訳における「異化」と「帰化」

—『風の歌を聴け』を中心に— (十三時三十分～十四時)

権 慧 (東京大学大学院)

司会 鈴木 将久 (一橋大学)

II-22 日本における中国映画『青い嵐』の受容 (十四時～十四時三十分)

蓋 暁星 (東京大学大学院)

司会 好並 晶 (近畿大学)

II-23 中国における岩井俊二の受容

——映画『Love Letter』と小説『ラヴレター』を中心に
(十四時三十分～十五時)

張 瑤 (東京大学大学院)

司会 好並 晶 (近畿大学)

Ⅲ 日本漢文部会 (五号館五三〇一教室)

十月十日 (土) 午前

Ⅲ-1 五井蘭洲の教学論—蘭洲は人々にどのように学問を勧めたのか

(十時三十分～十一時)

湯城 吉信 (大阪府立大学工業高等専門学校)

司会 小島 毅 (東京大学)

Ⅲ-2 佐藤直方における華夷論について (十一時～十二時三十分)

関 幹雄 (九州大学大学院)

司会 小島 毅 (東京大学)

十月十日 (土) 午後

Ⅲ-3 日本近世期における『律呂新書』研究

——中村楊斎と鈴木蘭園の比較を中心として—

(十三時三十分～十四時)

榎木 亨 (関西大学大学院)

司会 山寺 三知 (國學院大學北海道短期大学部)

Ⅲ-4 近代日本における『桃花扇』の受容様相について

——学者の言説を中心に——
(十四時～十四時三十分)

李 思漢 (京都大学大学院)

司会 大木 康 (東京大学東洋文化研究所)

Ⅲ-5 都賀庭鐘の中国演劇観——徐渭の影響を中心に——

(十四時三十分～十五時)

及川 茜 (神田外語大学)

司会 大木 康 (東京大学東洋文化研究所)

Ⅲ-6 『槐南集』未収詩考——『新文詩』に掲載する槐南詩を中心に

(十五時～十五時三十分)

陳文佳(華東師範大学)

司会 詹 滿江(杏林大学)

十月十一日(日) 午前

Ⅲ-7 史記旧鈔本「夏本紀」の本文について(十時～十時三十分)

李 由(南京大学大学院)

司会 小澤 賢二(南京師範大学)

発表要旨

第一部会（I 哲学・思想部会）

I-1 孔門における修養法

浜村良久（防衛大校）・水野 實（防衛大校）

孔子は道徳の意義とその修養を力説し、多くの俊英を育てたと伝えられるが、『論語』には孔子が実際に指導した修養法が明確には記されていないので、津田左右吉博士は孔門では知識教育が中心だったと論じている。しかし、修養法は道徳教育の核心にあるものなので、『論語』にその断片は残されていてよい筈であろう。本発表では『論語』の中から修養法に関する断片と思われるものを組み合わせることで、孔門の修養法の実体を明らかにすることを試みた。

孔門の修養法：①弟子たちは詩書等を読み（博文）、②大切に守りたい短い「事斯語」を自らを選んでそれにコミットし、③孔子の了承を得て（回雖不敏、請事斯語矣）、④身近に「事斯語」のメモを置き（子張書諸紳）、口に出し或いは歌って反復し念頭から離さなければ（南容三復白圭）、まず一日は守れるようになる（有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者）。⑤その言葉に専念し（未之能行、唯恐有聞）何度も自省しながら（日三省吾身）毎日繰返す（日知其所亡）。⑥三か月間守り続け（其心三月不違仁）余力が出れば詩書から新しい「事斯語」を選ぶ（行有餘力、則以學文）。古い「事斯語」も忘れないよう（月無忘其所能）時々復習する（學而時習之）。⑦最後に一生戒め守り続けるべき「事斯語」に出会いそれを貫き（一以貫之）、⑧感情と欲望のセルフコントロール（不遷怒、不貳過）を達成することだと考えられる。孔子の「忠恕」「思無邪」、顔回の四勿、南容の白圭、子路の「不枝不求、何用不臧」、子張の忠信篤敬などはそのような言葉にはかなるまい。『論語』は孫弟子たちが自己の修養のために古語や孔子・弟子の言葉を中心に集めた「事斯語（＝論語）集」で、「論う」とは自他の是非や善悪を論じ正すの謂である。孔門の修養法の淵源は殷の湯王時代にあったものであろう（大学「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」）。

1-2 「荀子」の天人分離説と礼論について

明神 洋

荀子は「性悪篇」で、質問者の「礼義積偽なる者は是れ人の性なり、故に聖人は能くこれを生ぜしなり」という反論に、聖人も暴君もその本性は同じであり、ひとしく悪いと答えている。人の心には生まれつき利益を好む「欲」がある限り、「性悪」とみなされるのである。聖人はこの「性」を変え、するために人為的な「礼」を設け、社会に秩序と安定をもたらしたというが、ここで問題になるのは「礼」の起源である。聖人ですら「性」が悪なら、「礼」はどこからやって来るのか。従来、欲にしたがう心と欲を制御する心に、人の心を分け、後者の心から人為的な礼義が生じると解釈されてきた。すなわち人には、情欲の心を否定する主体的な心（考える心）が内在し、聖人はそれに基づき、礼義を天地に作為すると考えるのである。いわゆる天人分離の説である。ここで「主体的」というのは、自己の欲を絶対悪として完全否定するのではなく、善と悪を相対化しながら（つまり実体化せず）、心が欲を制御するとされるからである。しかし上代中国の荀子が、このような近代西洋の個の精神に近い「心」を説いていたとは考えにくい。「天論篇」に「其の人深なりと雖も慮を加えず、大なりと雖も能を加えず、精なりと雖も察を加えず、夫れ是れを天と職を争わずと謂う」とあるのも、けっして自然と人間の分離を説いたものではない。「礼論篇」には、礼義が発生したのは「欲」と物とが互いに相俟って、調和のとれたように育成したからだであるが、だからこそ、余計な思慮や考察によって「天」の自然な働きを対象化し、滞らせてはいけないのである。「礼」は社会や家族の人間関係に適合して、自ずから更新する虚心¹¹中庸の行動とされ、そもそも主体と客体の分離などあり得なかつた。かくして大切なのは「物」の状況が変化する徴候を知ることであり、聖人とは、そのような「徴知」を深く身に養って「道」に精通している者なのである。

I-3 北魏高允の人材登用理論とその実践

恩塚 貴子（台湾大学大学院）

高允は北魏において、太武帝から孝文帝に至る五人の魏帝に仕え、優秀な文官として代々の帝王に重用された。この北魏政治の中心をなす高允は崔浩らと共に自国の史書『国書』三十巻執筆の中心人物として著名である。その他にも『左氏釈』『公羊釈』『毛詩拾遺』等、百余扁の文章を著した事から經学者、文章家としての一面を特に評価されている。

献文帝期に高允はその意志に従い「郡国」を設置し、その具体的内容と入学条件を奏上して国家制度となさしめた。そもそも中国では早くは漢代に州郡の地方から秀才或は孝廉に挙げられ、中央政府の試験に及第した者に官職を与えるという制度があった。しかしながら、その参加資格は貴族の子弟に限られ、平民は公立学校への入学さえ許されなかった。このような有力貴族を核にした門閥主義は南北朝期のスタンダードであり、「郡国」は中国に於いて初めて平民に向かって門戸を開いた公立地方学校であった。

当時北魏での官吏の地位は武高文低で、文官の地位は決して高いものではなかった。又「郡国」制を敷き、平民にも士官の道が開かれたとはいえ、実際には寒門出身者や平民が抜擢されることは簡単ではなかった。にも関わらず、自身が門閥出身である高允が「郡国」を以て衰退した經学復興を北魏全土に展開、人材育成に貢献すると同時に、自らも人材を発掘登用し、非漢族、寒門出身官吏をも含む『徵士頌』等によって北魏における文官の地位向上にも尽力した事は、非常に興味深い行動である。

本発表では主に史書の再読を通じて高允のより具体的な人材登用の例を挙げつつ、特にその登用理論と実践について紐解いていきたい。

I-4 心の中の天——王陽明「良知」考

志村 敦弘（東洋大学大学院）

明代思想界を代表する王陽明（名は守仁、1472～1528）の「良知」説については多くの先行研究があるが、「良知」と「天」との関係についてのそれは管見の限りでは見出せなかった。本発表では「良知」と「天」との関係を踏まえて良知の実像を解明したい。王陽明は良知について「天植の靈根」といい、また「良知は即ち天なり」ともいう。実は良知は「天」（理法的意味での）と不可分の関係にある。

ところで、王陽明自身はその思想の眼目を表現する語として、なぜ「良知」を選んだのかについて具体的には語っていない。発表者は、「良知」の典拠とされる、『孟子』尽心上篇「孟子曰、人之所不学而能者、其良能也、所不慮而知者、其良知也」の、朱子『集注』程氏曰、良能良知、皆無所由、乃出於天、不係於人、特に「乃出於天、不係於人」の句に注目した。発表者は、これが王陽明にとって、良知—天の相即さらには自身の思想の眼目を「良知」の二字に託した、その論拠となったと考える。

理由として次の三点を挙げたい。①そもそも儒教において天は至高の存在であり、畏敬の対象であった、②王陽明自身、良知説主張以前には、「天理」に順って本来の自己に立ち返れと説いていた、③王陽明の批判対象であった、朱子の手になる『孟子集注』が典拠ではあるが、肝心の「乃出於天、不係於人」の部分は、「程氏」、すなわち王陽明が『伝習録』等でも肯定的に引用している程明道もしくは程伊川の語であって、朱子の語ではない。

ではこのように天に意義づけられた「良知」とは、具体的にどのような特色をもっていたのであろうか。発表者は王陽明が批判的に対峙しながら思想形成を行なったところの朱子の思想との比較も交えながら、『伝習録』等に見える王陽明自身の言説に基づいて検証を進め、理法的天を背景としながらも、人の心のうちに擬制的にそのはたらきを収めた、いわば、心の中の天としての、「良知」の実像を描出したい。

I-5 來知徳の錯綜説―王夫之と比較して

金 東鎮（京都大学大学院）

來知徳（一五二六―一六〇四）は明末の著名な易學者であり、著作に『周易集注』（易經集注、一五九九）がある。その易學は程朱易學の伝統を汲んでいるが、經解釋において漢代象數學の技法を積極的に取り入れ、それに新しい意味を付與して独自の易説を形成した。

彼の易説は象を第一原理とするが、最も中心的なものは「錯綜説」である。「錯綜」という技法は周易の六十四卦の構造理論で、錯は乾・坤のような陰陽反対關係を、綜は屯・蒙のような上下反対關係を意味する。このような二卦の關係を、『周易正義』では「非覆即變」といい、虞翻はすでに旁通卦（錯）を經解釋にも用いた。四庫提要はこれを根拠として錯綜説は來氏の獨自説ではないと批判するが、二卦の關係を錯・綜と命名して經解釋に積極的に用い、錯を伏羲易に、綜を文王易に対応させて先天易と後天易の調和を謀ろうとしており、義理易と象數易を折衷させる獨自の試みであるように思われる。

來知徳の易學は、明清の易學者のみならず朝鮮及び日本の易學にも大きな影響を與えたが、彼に影響を受けた人物の一人に、明末清初の王夫之がいる。王氏易學を代表する「乾坤並建説」は、來氏の「錯綜説」を發展させたものである。

本發表では、錯綜説を中心にして來知徳と王夫之の易學を比較し、その共通点や相違点を明らかにすることで、近世易學史の展開における來氏易説の理論的特色を考察し、後世への影響の側面を窺いたい。

I-6 敖繼公『儀礼集説』における朱子学の受容

廖 明飛（京都大学大学院）

元の成宗大徳五年（1301）に成立した敖繼公『儀礼集説』（以下、敖氏『集説』）は、後漢末の鄭玄『儀礼注』とともに『儀礼』注釈史上の「双璧」と言われる。「集説」という書名が示すように、敖氏『集説』は朱子をはじめ、張載、陳祥道、呂大臨、李如圭、李心傳、楊復といった両宋の礼説を吸収し、新しい解釈を展開したものであり、『儀礼』の「新注」として明清時代に多大な影響力を持った。本発表は、敖氏『集説』が、いかに朱子の礼学や性理学を取り入れたかについて考察するものである。

中唐の韓愈は『儀礼』が読み難いことに苦しみ「現代には誠に無用の書だ」と主張したが、後に朱子は、北宋の熙寧年間、王安石が変法の一環で科挙制度を改革し、『儀礼』が試験科目の中から排除され、それ以降、『儀礼』の研究はほとんど進んでいないという当時の風潮を批判したうえで、門弟子の協力の上、『儀礼経伝通解』（以下、『通解』）を編纂したことは、「正に宋代礼学史上の一大偉観（池田末利氏）であった。その後の楊復『儀礼圖』『儀礼旁通圖』、宋末元初の呉澄、敖繼公の『儀礼』研究などは、朱子が『儀礼』を中心とした礼学を提唱したことに関わる、と皮錫瑞などが指摘している。しかしながら現在までの研究では、文献学の視点（主に本校勘学、『儀礼』の編次など）から、敖氏『集説』と朱子『通解』の関係が論考されるのみで、具体的な礼説の取捨選択に関する分析はほとんど行われていない。

本報告では、経書注釈学上の視点から、敖氏『集説』が、朱子『通解』の学説をどのように扱っているかを考察する。また、敖氏が朱子『四書章句集注』の訓詁を引用し、宋学の諸概念を導入していることにも着目する。以上により、敖繼公『儀礼集説』において朱子の学説がいかに継承され、またどのような新しい展開をみせたのかを明らかにしたい。

I-7 『經学歴史』手稿本からみる皮錫瑞の經学観

井澤 耕一（茨城大学）・橋本 昭典（奈良教育大学）

いわゆる「經学史」とは儒教において最重視される著作、すなわち「經書」に関する學術活動の歴史を指すが、その起源から清末までの流れを追った通史として広くその名が知られている書に、皮錫瑞（一八五〇—一九〇八）の『經学歴史』がある。本書は初学者のための「教科書」として、光緒三十二年（一九〇六）に刊行され、以後、中国のみならず、日本や朝鮮半島でも読まれてきており、今なお經学史関連の論考に多く引用される。ただし、その書は今文經学派の立場に一貫されたものとして、その使用に当たっては一定の留保が必要であることもまた広く知られるところである。

ところで、湖南師範大学図書館には『經学歴史』手稿本が蔵されている。この手稿本は『湖南省古籍善本書目』（岳麓書社、一九九八年）、『中国古籍総目・經部』（中華書局ほか、二〇一二年）において、「『經学歴史』二卷 稿本」として著録され、二〇一三年三月には、中国国務院により、「第四批国家珍贵古籍名録」に登録されている。しかし、従前、その存在及び内容について注目されてはこなかった。近年出版された『皮錫瑞集』（岳麓書社、二〇一二年）に収められた『經学歴史』本文はこの手稿本を参看して校勘したものであるが、幾らかの字句を補正するのみである。発表者二名は共同で二年がかりでこの手稿本の全巻を閲覧し筆写した。結果、そこには字句の異同にとどまらない通行本との著しい違いがあることを発見することができた。

本発表では、皮錫瑞晩年期の事績を踏まえながら、手稿本の実情及び性質を明らかにし、それを手がかりとして、『經学歴史』の成書過程及びそれに伴う經学観の変遷、また『經学歴史』を読むうえで今なお不可欠である周予同（一八九八—一九八一）の注釈の役割といった問題について考察し、後世、今文經学者として論じられる皮錫瑞の実像の再検証を試みたい。

I-8 「読書」と「歴史」——顧頡剛の中国學術史上における位置について

竹元 規人（福岡教育大学）

近代中国における學術の轉換は、しばしば「經学」から「史学」へ、という命題によって要約される。この命題のコロラリーとして、学問の対象が經書を中心とした「書物」から、考古学的に発掘された、文字を伴わない遺物へと拡大していったことが、注目されてきた。そしてこの動きを象徴する出来事として、古書の価値を否定したり、「読書」に反対する主張などが取り上げられてきた。顧頡剛（一八九三—一九八〇）は、紛れもなく中国近代史学の創始者の一人であるが、如上の學術の展開を前提とすると、顧の学問は文献考証に終始した、考古学によって乗り越えられべき過渡的存在とされてしまう。

だが、中国近代學術についての如上の理解には次の問題がある。まず、当時の學術の当事者達は、中国の長い學術の歴史、とりわけ直前の時代であった清代の學術を、批判的に發展・更新することを目指しており、文献から考古学へというドラステイックな轉換を想定することは、当事者の意識と異なる。他方、事実の問題としても、學術の展開において必ずしも内在的な連続の位相のみを重視すべきではないとしても、西洋近代から導入された新しい学問による大轉換を強調すれば、一面的な理解に陥る危険がある。また、「読書」という営為は単に本を読むことではなく、清朝考証学の方法との関わりで理解されねばならない。

顧頡剛は、一九二〇年代から中国最古の史書としての『尚書』研究にライフワークとして取り組み、没するまで膨大な注釈・研究を残した。顧が經学としてではなく、史学として『尚書』研究を進めたことは言うまでもないが、ではその研究方法は、特に清代の學術をいかに更新しようとしたものだったのか。顧は、『尚書』を読むことで、いかにして「歴史」に至ろうとしたのだろうか。本発表では、この問題を考察することで、顧の學術史上の位置を明らかにし、かつ中国近代學術の展開について、より公平な理解を目指す。

第二部会（Ⅱ文学語学部会）

Ⅱ-1 『天地瑞祥志』所引志怪佚文について―第十四神項からの考察―

佐野 誠子（名古屋大学）

『天地瑞祥志』は、薩守真なる人物が編纂した術数・占いの内容を主とした類書である。その序文によれば、唐の麟徳三年（666）に大王に献上したという。『天地瑞祥志』は、中国でははやくに失われたが、日本では陰陽道の家でよく利用されてきた。そして、現在は前田育徳会尊経閣文庫に江戸時代の写本が部分的に残る（また、京都大学人文科学研究所には、尊経閣文庫本の忠実な写しがある）。『天地瑞祥志』が引用する書籍には、経書や史書といった現在までほぼそのままのテキストが伝わる書籍もあれば、占いの書籍など、現存しない書籍も多く含まれる。そして、『天地瑞祥志』は、現存する部分のうち、第十四、十六、十七、十八、十九、二十において、『搜神記』、『幽明録』といった六朝志怪をのべ五十条引用する。

志怪は、現在も一定の資料は残るものの、経書や正史のように原本そのままが今に伝わっているわけではない。また『天地瑞祥志』で引用している志怪資料は、現在他書にも引用されており、その書籍に条文があったことが確認できるものもあれば、他に引用をみない佚文資料も幾つか含まれる。

今回は、『天地瑞祥志』第十四の神項目にみられる八部將軍についての『幽明録』佚文、四道王についての『統搜神記』佚文を紹介し、これらの神についてどのような神であったのかを考察する。八部將軍や、四道王は、志怪以外でも完全に一致する資料はみつけれなかった。しかし、分析を通して、これらは、道教の神である、もしくは、在野の神として存在した後に道教の神の直系に取り入れられた神である可能性があることがわかってきた。

さらには、今回とりあげる佚文資料はなぜ、他の類書等には採録されなかったのか、志怪資料の流伝事情にまで考察を及ぼせない。

II-2 『封神演義』における天意と情義の衝突

岩崎 華奈子（九州大学大学院）

明の章回小説『封神演義』は、殷周易姓革命を舞台とし、神道士や妖怪がこれに加わって方術や宝物で戦鬪を繰り広げる物語である。その登場人物は、人間が周・殷の両陣営に分けられるだけでなく、仙道も周に加勢する闡教と殷に加勢する截教とに二分されている。作中では、登場人物によって殷周の王朝交代が天意に基づく不可避の宿命として明言されており、ゆえに周陣営と殷陣営の抗争は、天意に従う者と逆らう者の対立として描かれている。

この天意をめぐる対立は、さらに骨肉の情や君臣朋友の義に関わる問題を内包している。例えば殷紂王の息子である殷郊・殷洪兄弟は、実母の姜皇后を惨殺した妲己と紂王に命を狙われ、闡教の仙人に救われた。後に弟の殷洪は父子相克の不義を冒さぬため殷に寝返り、天意に背いたとして闡教徒により誅殺される。兄の殷郊は弟が殺害されたと知るや、弟の報仇のため、やはり殷側につく。殷郊とその師広成子の対決場面では、広成子が天意に背いた弟子を批判するのに対し、殷郊は兄弟や師弟間の情を訴え、これらを軽視する師を非難する。このように、周側の人物は天意の遂行を絶対とし、殷側の人物は情義を重視してそれに抗う場面が、作中に散見されるのである。

殷周両陣営における天意と情義の明確な分離は、これらの衝突が『封神演義』全篇を貫く対立構造であることを示している。しかしこの構造は、ときに情義を以て天意に敗れる殷側の悲哀を際立たせ、ひいては周側の勝利に道義的動揺を与えている。物語を単なる勧善懲悪に仕立てず、敢えて天意と情義との衝突を先鋭に描く意義はどこにあるのだろうか。

本発表では『封神演義』における登場人物の言動を分析し、如上の構造が人物像にいかなる影響を与え、作品にどのような効果をもたらしているか検討する。その上で、この構造に隠された本小説の主題を明らかにしたい。

II-3 李白の送別歌行

乾 源俊（大谷大学）

天宝初年、李白は宮廷に召される。それは所謂「逸人の拳」に応じたものであったと思われるが、これを機にその歌行制作も山に還る友を送る送別の作として新たな展開を見せることになる。そもそも「逸人の拳」は王朝の喧伝する聖世具現の道具であり、召し出された隠士を送る公式の宴で、詩歌の応酬をするのが習いとなっていた。ここでは再三の招聘に応じて謁見、しかし仕官の要請は固く辞し、隠逸の志をのべて放還、という隠逸の姿が描かれる。それは一種の頌歌であった。李白の場合は、書き手自身が当事者として、聖世具現を演出する役割をふられており、物語が内部から体験されるわけで、その結果が自己の分身たる友人の像に反映される。当初の絵に描いたような理想の人生は、それが実地に生きられるにしたがって現実とのあいだに齟齬を生じ、苦い思いをともなうだろう。王朝の描くおおいなるゆめへの参画とそれからの離脱と。こうして李白の送別歌行は、離京後の長安体験の決算書ともいべき留別の作へと更なる変貌を遂げてゆく。都市を主題とした初唐型の七言歌行では、水辺へとむかう運動のなかで古人との心の交流が試みられ、見いだされた時間によって李白は慰撫されたのであった。ここでもやはり、自分は誰かという問いが問われるのであり、作品は現実の生に先立ってその意味を探索する場となるだろう。

詔誥資料に窺われる「逸人の拳」の実際、唐朝の道教政策と玄宗の老子信仰、それらによって醸される風潮など。時代を映す鏡としての李白歌行がこうした要素を反映しながら形成展開されてゆくさまについて考察する。

II-4 「李白と謝朓」再考―「澄江浄如練」を例として

石 碩（早稲田大学）

本発表で扱う「澄江浄きこと（一作静）練の如し」（「晚登三山還望京邑」詩）は、謝朓を代表する一句として、後世、様々な詩人に引用される。数多くの詩人によってこの句が注目された大きな要因は、李白の「金陵城西樓月下吟」詩に「解道いひえたり澄江浄きこと練の如しと、人をして長く謝玄暉を憶わしむ」の形で本句が引かれたためであり、謝朓に対する後人の理解は、李白の影響なしには考えられない。

謝朓の文学は李白という理解者を得ることによって、その評価を確立させたのであり、しかも李白が指し示す方向に従って謝朓の文学は解釈され、受容されることになる。しかしながら、従来の「李白と謝朓」の関係論は、そのほとんどが李白の文学を研究するために取り上げられたものであり、謝朓研究の方法として活用されることは少なかった。謝朓の文学に対する解釈、そして謝朓の詩人像の成立に李白が果たした役割については、これまで十分に検討されてこなかったのである。

実のところ、李白による「謝朓の愛好」は、謝朓に対する後人の理解を大きく決定づけることとなる。たとえば、李白が足しげく通い、その地で謝朓に思いを寄せる詩文を多く残すことで、謝朓は「宣城の詩人」となり、謝朓の文学は宣城時期を中心に理解されるようになる。一方で、「当塗の青山＝謝朓の別業＝李白の墳墓」という、よく知られる構図は、実際には、「李白による謝朓の愛好」が拡大解釈される過程で、李白の墳墓（青山）が謝朓に関連づけられた「誤解」であることが、発表者のこれまで研究で明らかになっている。このように、謝朓は李白によって焼き直しされ、李白によって解釈された「謝朓」が後世へと伝わってゆく。謝朓の文学の実像を理解するためには、李白の解釈が果たした役割を再度検討しなければならないだろう。

II・5 杜詩双声疊韻新考とその文学表現としての機能について

丸井 憲（早稲田大学非常勤講師）

清の周春（一七二九—一八一五）はその著『杜詩双声疊韻譜括略』において、杜甫の詩中に見られる双声語と疊韻語を「正格」「通用格」「借用格」「広通格」「変格」「散句不単用格」「古詩四句内照応格」の七種に分類している。彼はその調査に際し、原則として『広韻』に準拠しながら、韻母については『平水韻』をも併用し、声母については『韻鏡』などの等韻図に附された「三十六字母」を利用していったようである。本発表では『王仁昫刊謬補欠切韻』の完本や慧琳著『一切経音義』の反切によって推定される唐代標準音の体系に照らして、周春が取り上げた杜詩中の双声語・疊韻語の全用例を検証し、あわせてその文学表現としての機能について考察する。

杜詩中の双声語・疊韻語の多くは、先秦漢魏晋南北朝期のいずれかの段階で使用され始めたものであり、杜甫は先人のそうした遺産を十二分に継承し活用している。例えば「迢遞」来三蜀、「蹉跎」有六年（「春日江村五首」其二）などの対遇表現がこれにあたる。その一方で、それまでは擬声語・擬態語が中心だったこの双声・疊韻という表現手法を、主述構造や動賓構造を持つ二字語にまで及ぼし、これを意識的に運用し始めた点に杜甫の開拓性を見ることができよう。例えば「瘞天」追潘岳、「持危」覓鄧林（「風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友」という対句の上句の「瘞天」は「天せしを瘞へうづむ」という動賓構造を持つ双声語「エイエウ」（ともに影母）であり、下句の「持危」も「危ふきを持す」という動賓構造を持つ疊韻語「チキ」（之韻と支韻は合流）であるが、いずれも散文的な用語であり、詩中の双声語・疊韻語としては甚だ新奇である。そしてこうした手法は、中唐の韓愈の「秋懷詩十一首」其五に見える「婦愚識夷塗、汲古得脩綆」などの斬新な造語にも影響を与えたものと思われる。

II-6 「唐詩変革」

好川 聡（岐阜大学）

近年、盛唐から中唐への詩の変革の関心が高まっている。その重要な要素の一つとして、中唐元和期を代表する文人たちは編年で読まれるべき詩を作っている点が挙げられ、そのもとを辿れば李白から杜甫への変化ということになる。李白は盛唐以前の文学の集大成、杜甫は盛唐以後に発展していく文学を内包する存在として、様々な点で対照的な二人は、編年という点においても、李白の詩は編年しにくい、編年で読んでもあまり意味をなさない、逆に杜甫の詩はほぼ全て編年できる、編年で読んでこそ意味がある、といわれている。

だが、両者の詩を読んでみると、杜甫の安史の乱以前の「飲中八仙歌」などは、その人生に引きつける必要はなく、社会詩とされる詩群でも、安史の乱以前の「兵車行」と以後の「石壕吏」などでは、詠われ方が異なっているように感じられる。また、編年に意味のないとされる李白の詩も、安史の乱以降の作は「早発白帝城」や「奔亡道中」など、その人生に引きつけて読むべき作品を多く残している。松浦友久氏は『李白伝記論』の中で、安史の乱に関連した諸作品は、作者との伝記的事跡との距離が著しく小さく、正確な編年の可能なものが多いことを指摘しているが、それは李白詩の本質的な資質と相反するけれども多様性を与えているという消極的な評価に留めている。だが、詩人の枠を超えてこの時代の中に置いてみれば、そこにこそ意味があるように思われる。

このように盛唐・中唐という時代区分や、李白・杜甫は盛唐の詩人（または、李白―盛唐、杜甫―中唐）という枠組みを取り払って考えてみると、未編年から編年へというような詩の変革は、安史の乱を契機にして起こっているのではないだろうか。本発表では、李白と杜甫の詩を取り上げながらそうした問題について考えてみたい。

II-7 白居易の王維「秋夜独坐」利用

詩仏と称された王維の「秋夜独坐」の詩を読んでいると白楽天の「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」詩と多くの点で類似していることに気づいた。以下にその例を挙げる。

秋夜独坐 王維

独坐悲双鬢 独坐 双鬢を悲しむ

空堂欲二更 空堂 二更ならんと欲す

雨中山果落 雨中 山果落ち

灯火草虫鳴 灯火 草虫鳴く

白髮終難變 白髮 終に變じ難く

黄金不可成 黄金 成すべからず

欲知除老病 老病を除くを知らんと欲せば

惟有学無生 惟だ無生を学ぶ有るのみ

王維の詩の創作年は不明だが、「白髮」「老病」の語から判断するに、四十歳以降の作であろう。なお、この王維の詩は、阮籍の「詠懷詩」を踏まえている。

白楽天の「廬山草堂：」の詩は、彼が江州に司馬として、左遷されていた元和十三（八一八）年の秋の作と考えられる。時に白楽天四十七歳。

丹青攜手三君子 丹青手を攜ふ 三君子

丹羽 博之（大手前大学）

白髮垂頭一病翁 白髮頭に垂る 一病翁

蘭省花時錦帳下 蘭省の花時 錦帳の下

廬山夜雨草庵中 廬山の夜雨 草庵の中

終身膠漆心応在 終身膠漆 心応に在るべし

半路雲泥迹不同 半路雲泥 迹同じからず

唯有無生三昧觀 唯だ無生三昧觀有るのみ

榮枯一照兩成空 榮枯一照 兩に空と成る

共に白髮の翁の作であり、以下に詩句の類似を示す

王維「独坐」↓白楽天「独宿」、「悲双鬢」↓「白髮」、「雨中」↓「夜雨」、「老病」↓「一病翁」、「惟有学無生」↓「唯有無生三昧觀」

これらの詩句の類似から、白楽天が王維を意識して創作したことは明らかであろう。白楽天の作は前後の排列から秋の作と考えられ、共に秋の夜の雨の詠である。

王維が阮籍の詩を利用したことは白楽天も知っていたであろう。その王維の詩に更に一ひねりして白詩は詠まれたと考えられる。王維・白楽天は共に、高級官僚の地位にあったが、半官半隱の生活を送った。本発表では、この両詩を通して二人の共通の生き方の共通性、特に白は王の生き方に倣ったことを指摘したい。

II-8 『文苑英華』における『白氏文集』諸本の利用状況

富 嘉吟（立命館大学大学院）

北宋初年に編纂された『文苑英華』（以下『英華』と略称）は、唐・五代以来流傳していた唐人別集の抄本をよく利用している。現行の『英華』は、南宋の周必大が嘉泰年間（一二〇一—一二〇四）に校刻した本（宋版殘本および明代の抄本・刻本）である。これには彭叔夏などが當時まだ存在していた刊本や抄本を用いて校勘を行った「校記」が加えられている。本発表は、一例として『白氏文集』を採り上げ、『英華』及び「校記」に採用されている唐集の実態を探求しようとするものである。

第一として、『英華』所収の白氏詩文の本文状況を検討する。『英華』に採用された『白氏文集』は「七十卷を越える内容をもつ本」（花房英樹『白氏文集の批判的研究』頁一二〇）と考えられているが、『白氏文集』前後集七十卷の部分は那波本よりも原姿をよく保っており、その續集の殘欠本や拾遺外集に基づく部分も特別な価値を有している。しかも、金澤本中の慧萼本の傳抄本と対照してみれば、『英華』が利用した『白氏文集』は、金澤文庫本の源流をなす本と似ているが、その一方で両者の差異が見出しうることも注意される。

第二として『英華』の「校記」に採用された参照本を検討する。『英華』所収の白氏詩文の「校記」には、「京本作」・「蜀本作」・「川本作」・「浙本作」など参照本を明記するものと、「一作」・「集作」・「又作」など明記しないものがある。前者からは『白氏文集』が多種刊行されていた宋代の傳本状況を知ることができる。また後者のうち「一作」は南宋の孝宗朝における校本の異文をいうと推測され、「集作」は諸版本同一の異文、「又作」は舊来の抄本の異文を指すと思われる。こうした「校記」は、いずれも彭叔夏などの校勘作業を究明しうるとともに、『白氏文集』の諸相を伝える貴重な資料であることを示したい。

II・9 規範と表現——謝靈運「述祖德詩」をめぐる——

川合 康三（國學院大學）

古典文学というものは、いずれの文化圏においてもそうであろうが、とりわけ中国の古典文学においては、「規範性」が強く作用する。語彙、語法、題材、主題……、作品を構成するあらゆる面において、文学に内在する「規範」に合致することが求められる。

形式、型が則るべき基準として共有される時、それは「規範」となる。規範は明文化されたものではなく、文化共同体における暗黙の規範意識が文学を成立させているのであって、人々の間に共通して抱かれるこの意識こそが、中国古典文学を古典文学たらしめている。

表現者は規範に合致するかたちで言語表現を作り上げる。表現したいことは規範に沿うかたちで作品化される。その際、作品化される以前に懐かれた欲求、規範に合致したかたちで表現された作品、両者はどのような関係にあるのだろうか。

規範性を強くもつ『文選』のなかには、規範と表現の関わりを探るのにふさわしい作品が少なくない。今一つの例として謝靈運「述祖德詩」を取り上げてみる。そこには祖父謝玄が大きな功績を挙げながらその報奨を求めずに政界を去ったという事蹟が、「功成り名遂げて身退く」という美德に当てはめて讃えられている。人名を直接挙げることを避け、規範に従って仕立てられたこの作品を改めて読み直してみれば、その背後から謝靈運の個人的な、生々しく切実な表現の欲求が浮かび上がってくる。そのように読んでみて初めてそこに、謝靈運が書かずにはいられなかった激しい情動を感取できる。

しかし作者個人の情動、表現の欲求を読み取って、それを文学として受け止めるのは、近代に偏った読みではないか。当時においては表現したいことをそのまま言葉にするのが文学ではなく、或いはそれでは文学たりえず、規範の装いをまとうことよって初めて文学となったのだった。そこに古典文学というものの性格がある。

II・10 詞の形式の確立についての再考察——唐代韻文作品を用いて——

橘 千早（中央大学非常勤講師）

詞の形式が近体詩を土台として成立したことは、数多の研究者の認めるところであろう。中唐時代に作られ始めた初期詞は、近体詩の形式を多く踏襲した小令に加えて、北宋時代中期に慢詞が隆盛になることで飛躍的に発展した。同時に、「平仄通押」や「挿入韻」等の詞特有の押韻法や、五言句の「二／四・七言句の「三／四」といった近体詩にない独特の区切り方も生まれたといわれている。しかし、詞の四声を詳しく分析してみると、これらが律詩の平仄形式の全てを取り入れている訳ではないことに気づく。また、「詞に独特な」といわれている特徴のほとんどが、唐代に存在しなかった訳ではないことも。

たとえば、敦煌曲子詞では、律句に等しい平声押韻の句は、七言句では平起が、五言句では仄起が明らかに多い。これは言い換えれば、曲子詞の末尾三文字が「仄—平—平」となる確率が高いことを表しており、三言句においても同形式が「仄—仄—平」より多いことと共通する。それから、慢詞と呼べるほどに長い詞は確かに少数であるが、少なくとも文字数の多寡と形式の完成度は全く一致しない。つまり、小令でも《西江月》や《破陣子》等、すでに完成された形式の詞は多く存在する。また、「変文」等の語りもの作品の韻文では、宋词と同程度に押韻規則の緩いものや、一部の平仄通押、近体詩ではあり得ない区切り方をする句もよく見られる。

詞の形式に関わる様々な規則は本当に、宋代以降に作られたものであるのか。そして畢竟、詞の形式は如何にして確立したのか。敦煌曲子詞の重要性が次第に認められつつある現在、敦煌の韻文文学から今一度、詞の形式について再検討してみたい。具体的には、敦煌曲子詞の四声分析に加え、陶淵明の《帰去来の辞》に「声律を加えて」作られた蘇軾の慢詞《哨遍》等から詞特有の四声配置を整理し直すとともに、詩を越えて発展した偶数句（四言句、六言句など）の四声傾向について検討する。

Ⅱ・11 「青年期王国維の文学論と土台としての詩詞創作」

小島 明子（お茶の水女子大学大学院）

清末民初の学者、王国維（一八七七一—一九二七年）は、文学分野では、文学に政治から独立した芸術としての価値を認めた、近代文学批評の先駆者と評価されてきた。だが、清末には伝統的詩詞は衰退したとの観点から、創作者としては脚光を浴びず、これまであまり研究がなされてこなかった。

しかし、王の文学論は、詩詞の創作活動と密接な関係にあった。たとえば、著名な「人間詞話」は従来「境界」などの概念を提唱した批評として知られてきたが、それ以前の詩詞創作の経験に基づいており、批評家としてのみならず、詩詞の作者としての立場も窺える資料である。そこで本発表では、文学論とその土台となった実作を照らし合わせることにより、王の文学観について考察したい。

羅振玉が創刊した雑誌『教育世界』には、青年期王の詞集「人間詞」や詩集「静庵詩稿」のみならず、文学論も掲載されており、中にはのちの「人間詞話」の原型となったものも含まれている。この時期、王は師範学堂の教員から転職し、北上し学部に入局したため、環境の変化に伴い、文学や文学論にも変化が認められる。

王は当時哲学の研究に挫折し、文学に従事するようになったが、詩から詞へと移行した動機については不明であった。しかし、経歴を仔細に辿り、文学に何を求めたのかという点に着目すると、詞という形式をあえて選択するに至った理由が見えてくる。そしてそこには、必ずしも純粹な芸術性の追求とは言えない部分も発見できる。

科挙廃止前後、新たな知識人層として中央の教育組織に携わりながらも、政治には関与せず、民間側の立場にあった者により、国民のための文学の必要性が説かれ、模範が示されたことは、魯迅などへと繋がる時代の必然だったとも言える。だが、官から民へと文学の担い手に転換が生じた過渡期の一例として、王の存在意義は見逃せないものであった。

II-12 毛沢東『矛盾論』の「矛盾」の語法に関する一考察

土田 秀明（佛教大学非常勤講師）

毛沢東については、いわゆる『歴史決議』でその生涯が総括されたといえるが、思想についても同じことがいえるだろう。しかしそれで完結したというわけでは無論ない。ここで取り上げる『矛盾論』（1937年）は、日中戦争前後に構想されており、もとの理論が抗日戦争を踏まえたものであったことなどの背景面が、理論的にも思想的にも解明されてきている。こうした研究を踏まえて、ここでは毛沢東の思想をそのものとして扱うというよりも、少し視点を変えて、これを語法面から考えてみたい。

ところで、毛沢東の文章は、現代中国では規範的なものとされてきたようにみえる。しかし、『矛盾論』の語法を論じる立場からみると、かなり自由奔放である。筆者は、『矛盾論』の「矛盾」概念を語法論、とりわけ品詞を中心に、語法論の応用という限定的な立場からではあるが、考えてみたい。毛沢東の思想のいわば構造に対して、語法の面から、理論的な批判を試みたいのである。

もともと『矛盾論』は、事物の内部の矛盾性に着目して、そこに事物の運動・発展の契機を見るものである。基本矛盾・根本矛盾なども含め、弁証法の語彙を使っているが、とりわけ、主要矛盾と非主要矛盾、矛盾の主要方面と非主要方面というような概念を使って説明している。その語彙の使い方をみると、「矛盾」については、基本矛盾という場合などを含め、名詞的な用法と見るほうがよいものもあるが、基本的には「動詞」として使っているようにみえるのである。そうみることができるとすると、例えば「主要矛盾の主要方面」を中心にみてゆこうとするような欧米の理解もあるが、再検討する余地があるように思われる。『矛盾論』の構造を、矛盾の「動詞」性に集約するかたちで、報告したい。

II・13 「薛仁貴三箭定天山」故事を題材とする戯曲作品について

柴崎 公美子

唐の名將薛仁貴の武功を主体とした物語群の研究において、従来、『定天山』と題される伝奇はその存在を言及されはするものの独立した検討対象として俎上に載せられることはなかった。それは、薛仁貴物語については、決定版扱いをされる清代英雄伝奇小説『説唐後伝』に至るまでに、平話『薛仁貴征遼事略』や説唱詞話『薛仁貴跨海征遼故事』、明伝奇『白袍記』といった全容を語るテキストの存在があり、あくまでその物語の一部を材料にしたに過ぎないと思しき『定天山』は検討対象とするに十分な引力を持たなかったためである。

しかし、この伝奇を含めて、『定天山』のタイトルを持ち「薛仁貴三箭定天山」故事を題材とする戯曲数本を詳細に検討してみると、単に存在を言及するに止めておいて良いものとは考えにくくなった。

本発表では、①従来の研究で主に存在について言及されてきた旧国立北平図書館蔵『定天山』上下二巻全二十六齣、②台湾中央研究院歴史語言研究所刊《俗文学叢刊》所収の『定天山』総本全八齣、③《中国国家図書館蔵清宮昇平署档案集成》所収「定天山」総本全八齣の三種を取り上げ、それぞれの劇本の特徴、前後関係について調査し得たことを報告する。また、その内容から見るに、これらの戯曲作品は薛仁貴の事跡を主体として語る『説唐後伝』の系統よりも、唐の天下統一を物語る『唐書志伝通俗演義』や『隋唐兩朝志伝』といった歴史演義小説の系統に近い。しかしそうでありながら、歴史演義小説にはなく英雄伝奇小説にのみ存在する事象も内包している。以上のことから、隋唐時代を舞台にした講史小説や英雄伝奇小説におけるこれら「薛仁貴三箭定天山」故事を題材とする戯曲作品の位置づけについても考えてみたい。

II-14 公案小説集における訟師秘本からの影響について―『詳刑公案』を例にして― 堀川 慎吾（東北大学大学院）

『詳刑公案』は、明代萬曆（1573～1620）年刊に多く出版された公案小説集の一つである。また訟師とは、訴訟を代理したり請け負ったりする者を指し、訟師秘本とは訟師達が使った訴訟文書の書き方を教えたテキストのことである。夫馬進氏によると、訟師秘本は嘉靖（1522～1566）頃に出現し、萬曆の始めにかけて広く流布したとされる。従って、公案小説集と訟師秘本の流布の時期は重なっていることとなる。

先行研究において『詳刑公案』は、他の公案小説集との継承関係について論じられることが多かった。『詳刑公案』が『律條公案』や『詳情公案』に説話を提供したことが、大塚秀高氏、莊司格一氏、阿部泰記氏によって指摘されている。

さらに阿部氏は『詳刑公案』の中に、『百家公案』から翻案した話が五話、『剪刀新話』に基づいた話が一話、訴訟判決文書からストーリーを構成したと思われる話が若干数あるという重要な指摘をしている。阿部氏の指摘する訴訟判決文書とは、訟師秘本のことを指すと思われる。しかし阿部氏は、「若干数」とするのみで、『詳刑公案』のどの話がそれに当たるのか、また基となった訟師秘本とは何なのかについては言及していない。

訟師秘本には、ある訴訟における原告被告双方の訴状とそれに対する判決文や法律に関して説明した項目が収録されている。また『詳刑公案』が収める短編の公案小説でも、物語の中に原告被告双方の訴状が挿入されている。『詳刑公案』に見える訴状や判決文の中には、訟師秘本所収のそれと似たものがあり、両者の間には影響関係があると思われる。

本発表では、以上のように、『詳刑公案』と訟師秘本の両書に見える訴状や判決文を手がかりとして、『詳刑公案』のどの話が訟師秘本から構成されたものなのか、またその際に用いた訟師秘本は何なのか、そして訟師秘本からどのようにストーリーを構成しているのかということについて考察していきたい。

II・15 『紅樓夢』における莊子の世界―第六十三回所引范成大「重九日行營壽藏之地」を中心に 王 竹（桃山学院大学大学院）

『紅樓夢』における莊子思想の研究には、『紅樓夢』創作に寄り添いながら書かれた評閲（脂評）が極めて重要であると考え、これまで宝玉の「三大病」（第二十一回）と莊子との関係や、宝玉が『莊子』胠篋篇を書き続ける（第二十一回）意味を明らかにし、さらに、莊子の「無用の用」が『紅樓夢』にどのように反映されているかを分析して、『紅樓夢』本文に隠された莊子の世界を脂評に基づいて説明することを試みてきた。

本発表でとりあげる第六十三回のこの場面には脂評はない。しかし、曹雪芹は妙玉の口を借りて范成大の詩「重九日行營壽藏之地（重九の日に壽藏の地を行營す）」の一句を引用して絶賛したことは、先の第二十一回で宝玉の手を借りて胠篋篇を書き続けさせ宝玉の心の内を吐露したと、その手法は全く同じである。そこで、これは作者が単に物語の展開に合わせて適当に范成大の詩を引用したのではなく、必ずその詩句の背後に作者の真意が込められていると考え、所引の范成大の全詩を調べてみたところ、この詩もまた『莊子』を典故として世間の常識に縛られない真に自由な生き方を求める内容であることから、曹雪芹が妙玉に范成大の詩句を引用させることで、作者自身の死生観を高らかに宣言していることがわかった。さらに、錢鐘書が『宋詩選注』の中で、范成大の詩中の一句「鉄門限」は「王梵志の二首の詩」に基づくと指摘していることを受けて調べてみると、実はそれが『全唐詩補逸』巻第二所載の王梵志「無題」詩二首を典拠として詠まれた作品であることが判明した。

本発表では、第六十三回に引用された范成大「重九日行營壽藏之地」詩と、莊子の死生観に共感する王梵志「無題」詩二首及び「道情詩」との関連性から、曹雪芹が莊子色の強い王梵志の詩を下敷きにした「重九日行營壽藏之地」詩を引用したことの意味と、莊子の世界を取り込んで『紅樓夢』を創作した真意について管見を述べたい。

II-16 『水滸伝』の呼称表現―語り手はいかに人物を「待遇」するか―

佐高 春音（東京大学大学院）

『水滸伝』の語り手が作中人物を呼称する際には、その人物の姓名、あだ名、職業役職名を用いるか、「那人」「那漢」「那婦人」等の人称代名詞を用いるのが通常である。しかし、『水滸伝』（本発表では容与堂本に限定する）の地の文における人物呼称を調査した結果、ほぼニュートラルと言つてよい前述の呼称以外にも、語り手の作中人物に対する「待遇」が表われていると思われる呼称が、少数ながら用いられていることが分かった。

ここで言う待遇とは、語り手が話題の人物をどのように認識しているかということである。待遇の種類には尊卑、優劣、利害、親疎等が挙げられるが、大別するとプラスの待遇（敬語）とマイナスの待遇（罵語、軽蔑語）の二種類がある。

今回の報告では、主としてマイナスの待遇に焦点を当て、それらが『水滸伝』の語りの中で果たす効果と意義について検討する。『水滸伝』に現れるマイナス待遇の呼称には、「厮」「賊」「澆」「鳥」等のつく語があり、その対象人物や使用箇所には一定の傾向が見られる。とりわけ報告者が注目しているのが、悪女や男女の色事と関係する場面に多く現れる呼称表現である。全体データと個別例の分析を通し、特徴を明らかにしたい。

II・17 『初・二刻拍案驚奇』の韻文について

笠見 弥生（東京大学大学院）

明代の末、「三言」「二拍」をはじめとする、多くの短編白話小説集が出版された。これらの小説集の共通点は、講釈師が物語を語るといふ、盛り場で行われた語り物を再現した形式を用いていることである。とりわけ「二拍」では、この講釈師の語りがふんだんに用いられることが大きな特徴の一つであり、作品の中心が物語ではなく、作者の主張を代弁するかのよう雄弁な講釈師の語りにあると思われることも少なくない。

そうした「二拍」の語りの中でも、語り物の影響が最も大きいと思われるのが、処々に挿入される韻文である。とりわけ、作品の冒頭、入話と正文の連結部分、作品末尾の三箇所には、数件の例外を除き、ほぼ必ず韻文が挿入されている。これらの韻文は七言絶句の詩が最も多いが、その他の詩や詞など、形式は様々である。また、著名な文人の作品を引用していることもあれば、物語の内容を直接引用した、明らかに凌濛初の自作と思われるものもある。本来の語り物の場において、これらの韻文は客が十分に集まるまでの時間稼ぎや、場を盛り上げるためなど、実用的な目的をもっていたとされる。だが、「二拍」は明らかに読み物として出版された作品集であり、これらの韻文を欠かさず用いているのは、単に語り物の習慣を無意識に踏襲しただけであるとは思いがたい。特に上記三箇所の韻文は、全て物語の展開とは関係のない物語の外部、即ち講釈師のセリフの中に置かれている。作者は、講釈師を自らの代弁者として利用しているように、意識的にこの韻文を用いていたのではないだろうか。

本発表では主に「二拍」を中心に、この三箇所の韻文について、その形式、引用であるか作者の自作であるか、また入話・正文との関連などの点に着目して分析し、「三言」をはじめとする他の短編白話小説との比較を通じて、これらの韻文が作品中でどのような機能を与えられていたのかについて検討したい。

II-18 濱一衛の北平留学と上演史研究の成立

中里見 敬（九州大学）

青木正児は『支那近世戯曲史』（弘文堂書房、一九三〇）自序において、『宋元戯曲史』の著者王国維に対して「ただ読曲を愛して劇を観るを喜ばず」と批判的に言及している。青木は王国維の戯曲史に飽き足らず、音律を含む演劇の上演を視野に入れた演劇史を志し、同書は中国近世の演劇史を初めて体系づけた「記念碑的な作品」（入矢義高「解説」、『青木正児全集』第三巻）と称される。

青木正児の演劇研究を受け継ぎ、上演史研究として発展させたのが濱一衛（一九〇九～一九八四）である。京都帝大出身の濱一衛は、一九三四年から三六年までの北平留学を経て、一九三八年松山高商業学校に赴任、同年京大に着任した青木とすれ違いになっている。だが、両者に深いつながりのあることは、濱の雑誌『支那学』への論文掲載、『支那芝居の話』（一九四四）の弘文堂書房からの出版などにより窺うことができ、濱が研究面で青木に私淑していたことは明らかである。

本発表では、濱一衛が外務省文化事業部第三種補給生として留学した時期の具体的事実を、外務省外交史料館の資料、および周作人の長子・周豊一の回想録によって明らかにするとともに、学術史的観点から上演史研究の成立にとって濱の北平留学がどのような意味を有したかについて述べてみたい。見巧者な劇通であった濱個人の資質に加えて、京都と北平における多くの師友の支え、さらにそれを十分に活かすことのできた濱の人間性とは相まって、主著『北平的中国戯』（一九三六）、論文「最近に於ける北崑の変遷」（一九四一）、「平戯考」（一九四二）等に結実した。

留学のハイライトは一九三六年五月、呉興南潯鎮で蘇州「文全福」の南方崑曲を観たことである。それは青木正児が追い求めてようやく辿り着いた崑劇伝習所の童伶たちの十年後の姿であった。お芝居の神様が濱に僥倖をもたらした瞬間といえよう。

II・19 白先勇「玉卿嫂」の再創造とその意味

八木 はるな（東京大学大学院）

白先勇（1937―）の小説は、これまで兩岸三地において映像作品や舞台劇へと不断に改編され続けており、それは白先勇文学が經典化していく過程を表してもいる。台湾では1980年代、台湾ニューシネマの時代に起きた文芸映画ブームのなかで、「金大班的最後一夜」「孤戀花」などの下層階級の女性を描いた物語が、当時の著名監督によって映画化され始めた。他方、鄧小平時代に入り改革開放政策下となった大陸中国においても、1980年代には台湾文学の解禁とともに白先勇小説の受容とその映画化が始まり、また香港に関しては1970年代末にいち早く、白の作品を原作とした広東語劇やテレビドラマが製作されていた。いま台湾では、2014年2月に上演された舞台『孽子』の盛況が記憶に新しいなか、今年の12月に予定された連続テレビドラマ『一把青』の放映開始を、皆が待ち望んでいるところだ。

兩岸三地において、監督たちはどのような理由や状況のもとで、白先勇文学の改編を選択してきたのだろうか。また、ある外省人二世作家が台北という地で生み出した一つの筋書きは、異なる時代や場所において、どのような部分が継承され、あるいは変えられていったのか。人々は白先勇の作品をたびたび再創造することで、外省人二世作家の編み出す言葉にどのような意味付けを行っているのだろうか。

白先勇が台大在学中に発表した短編小説「玉卿嫂」（1960）は、最も早くから、また最も頻繁に改編されてきた白作品の一つである。そこで本発表は、台湾ニューシネマの旗手の一人である張毅による映画「玉卿嫂」（1984）と、台湾人監督の黄以功による同名テレビドラマ（1997年に台湾版、および2006年に大陸中国版を製作）を考察対象として、上述の問いに答えたい。さらには文芸作品が映画やテレビドラマという映像メディアのなかでどのように伝播されるのかという問いについて、また文字芸術の意義を再考できればと思う。

II-20 穆時英「斷了條胳膊的人」論——特に心理の表現に着目して——

福長 悠（東北大学大学院）

1930年代の上海で活躍した作家穆時英（1912—1940）は、1932年ごろに作風を大きく変えたとされる。1930年に文壇に登場した当初、穆時英は俗語を用いた一人称の語りにより下層の人々の生活を活写した。1932年頃から、学生やプチ・ブルジョワを主人公に上海のナイトクラブや繁華街を描写した作品を発表する。この時期の作品は横光利一ら日本の新感覚派の影響下にあるとされる。

二つの時期では、語りの構造から作中人物、表現技法までが完全に変化している。本発表では、穆時英が1932年に発表した「斷了條胳膊的人」（片腕を切断された男）を取り上げ、作風の変遷を考える一助とする。本作品の主人公の労働者が工場で機械に腕を切断される場面は、主人公の夢や空想の中でも同一の表現で反復される。反復の表現は、「瞧見」（見る）という動詞句の従属節として現れる。この語は、主人公の夢や想像を指す場合と、外的な現実を指す場合とに用いられ、現実と非現実の境界を不透明にしている。それにより、主人公の体験する心的現実が前景化されている。

さらに、作品の末尾で、主人公は彼に替わって雇われた労働者が同じように機械に切断されたさまを見る。主人公はすべての労働者が切断に遭うさまを想像する。この想像において、労働者の地位は相互に置き換え可能であり、彼らが生産する煉瓦との類比でとらえられる。

本作品は産業社会における労働者が画一化し無個性化するさまを、労働者の心理を通して書いた作品であると考えられる。穆時英は同時期に執筆した「空閑少佐」において、上海事変で捕虜になった日本軍人に取材しつつ、やはり心理に着目することで個人と組織との葛藤を書いている。穆時英の作風の変化を考察するに際しては、心理表現の展開に留意する必要があるだろう。

II・21 村上春樹文学の中国語訳と韓国語訳における「異化」と「帰化」——『風の歌を聴け』を中心に

権 慧（東京大学大学院）

村上春樹デビュー作『風の歌を聴け』（以下『風…』と略す）は一九九〇年代初頭に中国と韓国に翻訳され、この二十余年間幾度も重版・改版されており、読者に愛読されつづけてきた。『風…』が最初に韓国に翻訳されたのは一九九一年のことであり、現在まで合計八つの版本がある。これらの版本の発行部数は不明であるが、現在流通している版本は二〇〇四年に文学思想社より出版された尹成元訳であり、二〇一二年七月まで合計二六回増刷されている。一方、中国では一九九二年に林少華により『風…』が翻訳され、二〇一四年には新たに修正を行った『風…』新訳（「村上春樹代表的長編小説十部精装本セット」所収・上海訳文出版社）が刊行された。外国の読者にとって訳本が村上世界に入る必須の経路であるため、翻訳に関する議論は絶えず起きており、それは単なる直訳か意訳かという問題にとどまらず、村上文学の感性や日本文化を如何に伝達するか、そして外国文化に直面する自国文化を如何に保全するか、あるいは変革するべきかという文化論にまで広がっている。

本発表ではこの二十余年間に村上春樹の『風…』がいかにかに中国、韓国に翻訳され、受容されたかを比較分析し、中国語訳本と韓国語訳本の特徴をまとめ、この二十余年の中国と韓国の村上文学翻訳状況を概観し、翻訳における「帰化」から「異化」への変遷について考察する。

II-22 日本における中国映画『青い風』の受容

蓋 曉星（東京大学大学院）

1987年張軍釗の『一人と八人』（現題『一個和八個』）、陳凱歌の『黄色い大地』によって、中国ニューウェーブの誕生が宣告され、国際的に注目を集めた「第五世代」が登場した。張芸謀の『紅いコーリャン』（原題『紅高粱』1987年）が1988年ベルリン国際映画祭でグランプリを獲得した後、中国映画は高揚期に入る。中華人民共和国建国後、長らく中国共産党のプロパガンダの役割を担っていた中国映画が多様な芸術性を発揮しはじめたのだ。『狩り場の掟』（1984年）『盗馬賊』（1986年）というチベット族題材の映画で個性を見せた田壮壮は、1993年に文化大革命をテーマにする『青い風』を発表した。同映画は93年の東京国際映画祭においてグランプリを獲得するも、中国政府から上映反対の抗議を受ける。そして、田は中国で監督活動十年禁止の処罰を受けた。

このような経緯も含めて、『青い風』は日本と関わりの深い作品である。本発表は日本の評論界及び一般観客はどのように『青い風』を見ているか、そして、『青い風』を通して、文化大革命及び中国共産党体制の現状をどう認識するかを探ってみたい。

文革を扱う映画といえば、第四世代監督の代表である謝晋の『天雲山物語』（原題『天雲山伝奇』、1981年）『芙蓉鎮』（1986年）、さらに同じ第五世代である張芸謀の『活きる』（原題『活着』、1994年）、『妻への家路』（原題『帰来』、2014年）などがある。これらの作品はいずれも日本に配給され、映画館で上映されている。日本の中国映画ファンは、『青い風』とこれらの作品を比較しながら見ることが多いだろう。その比較の中で、『青い風』はどのような位置を示しているかも含めて考察したい。

本発表では資料として書誌、新聞、さらに一般観客のインターネット上のレビューも取り扱い、日本における受容の諸相をなるべく広範囲に亘って取り上げること目標としている。

II・23 中国における岩井俊二の受容——映画『Love Letter』と小説『ラヴレター』を中心に 張 瑤（東京大学大学院）

岩井俊二（いわい しゅんじ、一九六三～）は最初の長編映画『Love Letter』を監督し、現在中国でも著名な日本人映画監督・小説家の一人である。映画『Love Letter』（以下『Love』と略す）は一九九五年、日本全国で上映された後、中国語圏の台湾、香港、大陸で大好評を博し、「ラヴレターブーム」を次々と引き起こした。二〇〇四年には簡体字中国語訳版小説『情書』（日本語原作一九九五年刊行）が初めて中国で刊行されている。今年は『Love』上映二十周年であり、中国におけるその流行と受容を回顧し、越境・融合・再生が急速に進行する今日の中国語圏における映画と小説の様々な面を検討する絶好の年と言える。本発表では、同一作者の岩井俊二による映画『Love』と小説『ラヴレター』（以下『ラヴ』と略す）の改編とその意図を探るとともに、両作品がどのように中国で紹介されたか、その流行の時代背景・受容心理をめぐり、新世紀前後の中国映画界・文学界を視野に入れながら検証したい。

本発表では、第一に、映画『Love』の日本語脚本と『ラヴ』の日本語テキストとを比較した上で、映画から小説への改編について分析する。第二に、中国第六世代映画監督（王全安『月蝕』、婁燁『蘇州河』、張元『緑茶』）、『七〇後』女性作家（安妮寶貝、金仁順、朱文穎）、『八〇後』作家（張悅然、郭敬明）を取り上げて、それぞれ「自己分裂」、「自我否定」、「双子コンプレックス」などの観点から創作意図とその意義を、新世紀前後の中国における岩井俊二映画・小説の受容にかかわる考察する。最後に、中国の広範な観衆・読者の反響にも注目しながら、岩井俊二映画・小説の受容のより包括な意味を検討する。

第三部会（Ⅲ日本漢文部会）

Ⅲ-1 五井蘭洲の教学論—蘭洲は人々にどのように学問を勧めたのか

湯城 吉信（大阪府立大学工業高等専門学校）

本発表では、江戸時代の儒者五井蘭洲が人々にどのように学問を勧めていたかを紹介したい。

蘭洲は、懷徳堂の全盛期を築いたとされる中井竹山・履軒兄弟の師であり、その後の懷徳堂の学問を方向付けた重要な人物であると言える。懷徳堂に手厳しい批判を浴びせた上田秋成も、蘭洲だけはすぐれた学者であったと評価している（『胆大小心録』）。だが、その著作はまとまったものが少ないため、これまでその思想の全容は解明されてこなかった。

懷徳堂は享保九年（一七二四）の開校に際し、日講を行うことが幕府の官許の条件になっていたが、その講師がいなくて困っていた。その講義を任されたのが蘭洲である。だが、当時、大阪では学問不要論がはびこっていた（証拠は枚挙に暇がない）。そのような雰囲気の中、蘭洲はどのように人々に学問を勧めたのか、本発表ではそこに焦点を当てたい。幸い蘭洲の講義録は大阪府立中之島図書館に多く残されている。本発表では、『蘭洲遺稿』やこれらの講義録を利用し、当時、蘭洲がどのような内容の講義をどのように行っていたのか、再現を試みたい。

懷徳堂研究は、これまで富永仲基や山片蟠桃など目立つ学説を唱えた学者が注目されてきた。また、竹山・履軒についても、その教学ではなく、経学研究など学術研究に焦点が当てられてきた。現代の言葉で言えば、高等教育機関の柱である「教育」「研究」の中、研究に偏って研究されてきたと言える。だが、懷徳堂は何より庶民教化のための学校であった。そのような点からすると、実際にどのような教育がされてきたかは、本来、懷徳堂研究の中心であるべきであろう。また、その教授内容については、定書によりそのカリキュラムが紹介されてきたにとどまり、その教学内容にまで踏み込んだ研究はされてこなかった。本研究はその間隙を埋め、懷徳堂の全容を明らかにする一助となることを目指している。

III-2 佐藤直方における華夷論について

関 幹雄（九州大学大学院）

佐藤直方（一六五〇～一七一九）は、山崎闇斎の高弟であり、「崎門の三傑」の一人と称されている。しかし後年、直方は師である闇斎から破門される。その要因のひとつとして、晩年、闇斎が垂加神道に傾斜していったという点が挙げられる。闇斎に朱子学者と神道家という面がある以上、その門人の学問方法も様々な様相に分かれることになる。儒学のみを純粹に学ぶ者もいれば、神道を学ぶ者、または神儒を兼学する者もいるという状況であった。その神道の影響は直方の門人にも及ぶ。直方の門人に跡部良顕（一六五八～一七二九）がいる。良顕は、直方のもとで朱子学を学んだが、後に垂加神道に転向していくこととなる。そのような状況下にあった直方にとっては、神道といかに対峙していくかということとは切実な問題であったと考えられる。

更に、崎門学派内で活発な議論が行われていたものとして、華夷の論がある。三傑の一人である浅見綱斎（一六五二～一七一）は、『中国辨』を著した。直方の華夷に対する見解は、門人の小野信成により『中国論集』として編集された。さらに、実は直方には『神国論』という著作もある。当時の学派内においては、中国―夷狄という概念を有する儒学を学ぶ上で、自身の生きる日本という国をどのように位置づけるのかということは極めて重要な問題であったと言える。

そこで本発表では、直方の中華論・神道論について、直方の著作と、直方と門人との関係という両面から考察していきたい。具体的には、直方の『神国論』等の著作を手がかりにして、国家観や神道観を検討するとともに、華夷論における日本の位置づけを再考したい。また、神道派の門人との関係をあらためて捉えなおしていく。特に直方に義絶された跡部良顕らに対する直方の対応を辿ることで、神道観を明らかにしたいと考えている。

Ⅲ・3 日本近世期における『律呂新書』研究―中村惕齋と鈴木蘭園の比較を中心として― 梶木 亨(関西大学大学院)

日本近世期における儒教の展開様相については、既に学術界において数多くの研究成果が報告されているが、儒教の楽に対する影響、とりわけ楽律論については、荻生徂徠『楽律考』等については検討されているもの、朱子学者による楽律研究については、これまで十分に検討されてこなかった。しかし、同時期における楽律研究を概観すると、京都の朱子学者である中村惕齋(1629―1702)の『律呂新書』研究が重要な位置を占め、その著作が重視されていたことがわかる。

『律呂新書』は、朱熹(1130―1200)の友人であり、弟子でもある蔡元定(1135―1198)により著わされた楽律書であり、朱子学に関する重要典籍を収載した『性理大全』に収録されたことにより、朱子学を代表する楽律書としての位置を確立し、その後、同書は朝鮮・日本など近世期の東アジア各地へと伝播して研究された。その中でも、日本における『律呂新書』研究の基礎を構築し、日本近世期の楽律研究に重要な影響を与えたのが中村惕齋である。

中村惕齋の『律呂新書』研究に関する著作としては、同書の誤脱を補正して訓点を加えた『修正律呂新書』及び、『律呂新書』に関する惕齋の見解をまとめた『筆記律呂新書説』の二冊がある。前者は、弟子である齋藤信齋(生没年不詳)により刊行され、『律呂新書』研究を行なう際のテキストとして広く普及したが、後者は刊行されなかったものの、幾度も転写が繰り返されることにより普及し、朱子学者のみならず、日本において平均律を提唱した和算家の中根元圭(1662―1733)等へも影響を与えた。しかし、すべての学者が『律呂新書』を肯定的に捉えていたわけではなく、とりわけ鈴木蘭園(1741―1790)の『律呂新書』研究は、同書を批判的に研究したものととして注目に値する。

本発表では、中村惕齋と蔡元定の『律呂新書』に関する認識の差異を明らかにした上で、惕齋と鈴木蘭園の『律呂新書』研究との比較を通して、日本近世期における楽律研究の一端を解明したい。

Ⅲ・4 近代日本における『桃花扇』の受容様相について―学者の言説を中心に― 李 思漢（京都大学大学院）

文学史上、清代伝奇の双璧と並称される『長生殿』と『桃花扇』は、中国人と日本人の双方に、その各々の魅力を伝えた。しかしながら、盛んに上演され中国本土で崑曲の人気演目となった『長生殿』に比して、曲辞の美しさが評価され、読む戯曲の傑作となった『桃花扇』の方に、むしろ日本人はより関心を寄せていたのである。

明治三十年の笹川臨風の『支那小説戯曲小史』で、『桃花扇』が紹介されている。またその少し前、森槐南がすでに『桃花扇』を大学で教え始めていた。大正時代に入ると、塩谷温、山口剛、今東光三人の、それぞれの『桃花扇』訳本が世に出たため、『桃花扇』は当時、日本で最も多く訳本を持つ清代伝奇となった。要するに、日本人は中国人よりも早い段階で『桃花扇』の学術的な価値を認めていたと言えよう。

『桃花扇』がそれほど日本人に注目されていた理由の一つとして、当時の日本人は、すでに江戸時代より流行してきた『華夷変態』、『板橋雜記』を通じて、『桃花扇』の歴史的背景、即ち明清交替期、南京秦淮の様子などについて、一定の認識を持っていたことが挙げられる。しかしながら、学者らが『桃花扇』にとりわけ注意を払った原因は何か？本報告は、『桃花扇』が、単なる読み物から、学術的な議論で取り上げられる対象へと変貌していく過程を解明していきたい。

従来の日本の研究は、ほとんど元雜劇に焦点を絞ったもので、その中では『西廂記』が最も注目されている。それ以外の、特に明清伝奇の受容状況については、まだ十分に分かっていない。今回は、『桃花扇』を一例として、学術史の視点から、日中両国における近代知識人の戯曲認識の相違を検討していく。そして、日本人が『桃花扇』を読む視点、日本の研究者が著した中国文学史の中での『桃花扇』をめぐる説明や論点、そして『桃花扇』に対する評価を考察する。

III-5 都賀庭鐘の中国演劇観——徐渭の影響を中心に——

及川 茜（神田外語大学）

読本の鼻祖と目される都賀庭鐘（享保三年／一七一八〜未詳）の作中には、明・徐渭（正徳一六年／一五二一〜万曆三十二年／一五九三）の雑劇『四声猿』の影響が指摘される。

『四声猿』にみられる四部形式の短劇という構成は、庭鐘が謡曲及び浄瑠璃の漢訳を試みた『四鳴蟬』（明和八年／一七七二）において踏襲される。さらに、その一五年後に上梓した『莠句冊』（天明六年／一七八六）の一篇「吉野猩猩人間に遊て歌舞を伝る話」でも『四声猿』の一篇「狂鼓史漁陽三弄」の趣向が用いられ、『四声猿』を長く読み続けていたことが窺われる。なお、庭鐘の読書筆記『過目抄』第六冊にも徐渭『徐文長秘集』からの抄記が見え、戯曲に限らず徐渭の作品に触れていたことが知られる。

庭鐘は『四鳴蟬』の「填詞引」において、「且元人詞曲。根於隋唐。其巧獨出於一代。如琵琶西廂。最其尤者也。」と述べ、『琵琶記』『西廂記』の二作を「元人詞曲」の代表作とみなし高い評価を与えている。また、『義経盤石傳』（文化三年／一八〇六）の跋では「西廂は麗情巧思を詞曲に致せども当今は宋元を取ざるに棄るる」と記している。ただし、庭鐘が「填詞引」で高く評価する『琵琶記』『西廂記』はいずれも元雑劇に典型的な四折の構成は有さない。『琵琶記』は明代に盛行した南戯の端を開く作品であり、『西廂記』も全篇五本二〇折の長編である。また、『四鳴蟬』の技術上の問題について先行研究では、庭鐘が『四声猿』の四部から成る構成にならう一方で、雑劇に用いられる北曲ではなく南戯に用いられる南曲の曲牌から選んで作詞し、曲譜のみならず南戯の実作とりわけ明・高濂の『玉簪記』を範と仰いだことが明らかにされている。

本発表では、庭鐘の著作に表れる中国演劇観を整理し、徐渭の戯曲の実作に加えて戯曲理論書『南詞叙録』を手がかりとし、庭鐘の創作態度において、特に南曲の重視に見られる徐渭の演劇観の影響を考察する。

Ⅲ・6 『槐南集』未収詩考——『新文詩』に掲載する槐南詩を中心に 陳 文佳（華東師範大学）

明治四十五（1912）年三月、森健郎編集、森川鍵校字、東京文会堂書店より刊行された『槐南集』廿八卷（八冊）は、作者森槐南（1863～1911）が明治十四年（1881）春から没前の明治四十四年（1911）一月までの間に作った古今体詩2621首、詞96闕、小令2闕、南北曲2套がほぼ年代順に排列されている。おおよそ槐南生涯の詩・詞創作を網羅したものになっていると言つてよい。巻頭にある息子の健郎の誌によると、「辛巳至甲申、槩係手訂、乙酉以後、則及門諸弟子共相商訂、逐年編次」ということで、明治十四年辛巳（1881）から十七年甲申（1884）までの間の作品は槐南自ら編集したものだと思われる。『槐南集』所収の最初の作品は、明治十四年初、槐南十八歳のころの「雜擬」三首であるが、実はその前に槐南は既に漢詩壇に進出し、詩文創作活動を始めていた。

槐南の父、森春涛（1819～1889）が編集した『新文詩』（1875～1884、計100集）、『新文詩別集』（1876～1884、槐南参訂、計28集）、『新新文詩』（1885～1886、槐南訂、計17集、外未定稿1冊）は明治初期の漢詩壇において最も影響力の大きい漢詩文雑誌であったが、槐南は掃雪山童、台洞小賓、台南小史、槐南小史などの別号、また字の由来で『新文詩』シリーズに古今体詩263首、詞45闕、漢文2篇、小令2闕、南曲1套、伝奇1種を発表した。槐南12歳のころの処女作から23歳までの作品が殆ど含まれている。そのなか、多くの作品が後の『槐南集』に所収されていない。これらの『槐南集』の未収作を整理・統計したうえで、その内容を分類し、趣旨を解説しようと思う。また、なぜ『槐南集』に収録されていないのかについて説明していきたい。

Ⅲ-7 史記旧鈔本「夏本紀」の本文について

李 由（南京大学大学院）

日本に伝存している史記旧鈔本と目されるものはおよそ十四卷ある。

これら十四卷は唐時代の写本は少なく、殆どが日本人による後世の転写本であるが、その重要さはいささかも失われていない。史記旧鈔本の資料的価値については、従来より中国では羅振玉、また日本では瀧川資言、水澤利忠らによって、それぞれに優れた研究が蓄積されている。

本発表では、まずこれらの旧鈔本を用いてもう一度『史記』の本文を校勘し、通行本『史記』の本文や古注釈における顕著な誤りを幾つかに分類して検討したい。第一類は、旧鈔本を用いた通行本の本文の衍文と脱文及び誤文の修正である。第二類は、通行本に見える南朝宋の裴駰『史記集解』の脱文、誤文の修正である。第三類は通行本の『史記集解』に司馬貞『史記索隱』が混入されたことについてである。最後に、旧鈔本の書き入れに引用された『史記索隱』を用いて通行本『索隱』の誤りを修正することである。

また、最近発見された台北国家図書館所蔵（日本求古楼旧蔵）旧鈔本「夏本紀」の底本について、これが宋の真宗期の鈔本に基づくものであろうことを検証したい。

なお、二〇一三年、中華書局より『史記』の新しい点校本が刊行されたが、同書は日本の旧鈔本に基づいて旧本の誤りを訂正したことが凡例にも明言されている。しかしこの修訂本は、前述した台北国家図書館所蔵「夏本紀」、宮内庁書陵部所蔵「范雎蔡澤列伝」等、なお幾つかの旧鈔本の本文を利用しておらず、いまだ完璧なテキストとは言い難い。今回の検討によって、この点を明らかにしたい。

國學院大學 博物館企画展示室（学会開催記念）

「江戸のベストセラー『唐詩選』の世界」

会期／平成二十七年十月五日（月）～十一月十五日（日）

平安時代の『白氏文集』の舶載と流布、室町時代の『三体詩』、江戸期に入つての『杜律集解』の盛行は往時の中国文学のわが国における受容を端的に物語っている。くわえて江戸期における『唐詩選』の爆発的な流行は、たんに學術の進展や文芸の興隆と呼ぶにとどまらない、社会的な現象ともいって良いであろう。『唐詩選』は、中国では早くに偽書説が標榜されて顧みられることはなかった。中国において唐詩の選集と言えば、孫洙の『唐詩三百首』が代表とみなされて、今日に至っている。日本においては、むしろ『唐詩選』こそが唐詩選集の代表とみなされ、今日に至っている。わが国における中国文学、とりわけ漢詩や唐詩の受容の實際を漢籍を通して概観し、その背景を探る。

國學院大學は、学問の領域、あるいは研究の視座を、大学の名に冠している。学問と言えば、「漢学」を意味した時代から、それを批判原理として自らを顧みて、自らの拠つて立つ基盤を確立すべく誕生したのが「国学」であった。現在、中国学の置かれている状況は、グローバル化する社会に地球規模的に対応するだけでなく、同時に中国に関する学問を内外の視座から今一度照射すべき時代に際会してい

るのではなからうか。

わが国が誇るべき中国学の伝統は、一つは世界規模から見て批判に耐えるものであり、今ひとつは、わが国独自に展開してきた分厚い研究の蓄積と伝統的な文献学の上に立脚していると考ええる。この両者を進展させることこそ、今後の中国学の道が開かれるように考える。今回の展示が、その課題を考える契機となれば幸いである。